2015

地域×大学＝域学

いきがく

高知県立大学

自分が安心して
住める場所を
見つけました。
大学を
卒業しても
三里に住んで、
ここで
生きていきます。

学生

芝田早紀子さん

看護学部4回生。大阪府出身。高知市消防団三里分団員。イケあい地域災害ボランティアセンター前代表。卒業後は、南国市内の病院に勤務しながら、仁井田地区に居住する予定。

県外から来て、
三里のことを
思ってくれる。
たいしたもの！
すごい！
やさしい心を持って、
お年寄りに好かれる
人間になって！

地域

秋田光洋さん

高知市消防団三里分団種崎部部長。自営。イケあい地域災害ボランティアセンターが主催した「未（魅）災地ツアー」や「みさとフェア」、三里地区の避難訓練、防災倉庫の点検などで、学生たちを指導・助言してくださっている。

「県民大学」による「域学共生」

「県民大学」の若い力―「立志社中」

高知県立大学は、「県民大学」としての歩みを続けています。教員は地域のみなさまと協働しながら、県内各地で地域振興に取り組んできました。また、平成25年からは、地域の課題解決に主体的に取り組む学生を大学として支援する「立志社中」をスタートさせました。若さにあふれた企画力と行動力で、学生たちは地域の‘元気’に力を発揮しています。

地域と大学の新たな関係―「域学共生」という考え方

従来、私たちは、このような活動を「大学の地域貢献（社会貢献）」と呼んできました。「大学が地域を変える」活動です。

そういう活動を続ける中で、私たちは気づいたのです。それは、「学生や教員たちが地域で育てられている、学ばせてもらっている」ということです。「地域が大学を変える」ことを実感しています。

このような経験から、高知県立大学は新たに「域学共生―大学が地域を変える。地域が大学を変える」という理念を掲げました。地域と大学が互いに手を携え、教え合い、学び合い、育ち合いながら、高知県の地域の再生と活性化を実現したいという想いを込めた新しい言葉が「域学共生」であり、地「域」と大「学」が「共」に「生」きていくという考え方です。

地域と大学をつなぐ「域学共生コーディネーター」

その実現のために、地域と大学をつなぐパイプ役となるのが「域学共生コーディネーター」です。地域課題の「御用聞き」として、高知県内を回りながら活動しています。

「課題解決先進県・高知」を目指して、地域のみなさまとともに力を合わせて取り組んでいます！

域学共生コーディネーター
和田 剛

地域×大学＝域学
いきがく
1

［ミッション］

防災活動での学びを通じて大学・地域の防災力を高める!!

［チーム名］

イケあい地域災害学生ボランティアセンター

活動の目的

高知県内で災害が起きた時に災害ボランティアセンターと連携してボランティアコーディネートを行うこと。また学内や地域での防災啓発を行うことを目的にしている。

大学のある三里地域での地域活動に重点を置き、地区運動会・みさとフェアへの参加だけでなく、地区総会・避難路整備や点検、バーベキューなど地域に密着した防災活動を目指している。

また女子比率が9割という特性を生かし「女性や子どもの視点でつくる避難所運営」研修や応急救護、要援護者支援、非常食など学部の特性を生かした防災活動とともに県内3大学の連携を視野に置いて活動をしている。

［構　成］
学生63名
（文化学部、社会福祉学部、健康栄養学部、看護学部）
教職員2名

学生と地域がつながるコラボうさい
（コラボレーション+防災）

池キャンパスのある三里地域は、南海トラフ地震では家屋倒壊や津波による甚大な被害が想定されると同時に防災活動が活発な地域でもある。

東日本大震災をきっかけに、防災サークル「イケあい」が結成された。「災害に強い大学を目指す」という大学の後押しもあり、2012年9月に岩手県沿岸への復興支援バスを運行し学生48人が参加した。復興支援活動を体験した学生たちの多くが防災サークルに加入。復興支援活動を通じて地域での日常のつながりが重要であることを学び、地域と学生がつながる土壌が醸成された。

これまでは当日のみの参加だった三里地区運動会に企画会議から参加し防災リレーの企画提案なども行った。地区運動会への主体的な関わりをきっかけに信頼関係が生まれ、津波避難路の整備や点検を兼ねたハイキング、地域でのバーベキューにも参加するようになり、三里小学校での防災授業では岩手県での復興支援活動について発表するなど、地域・学校とのつながりができた。

一方、郡部に大学がなくつながりが持てないとの声もあり、最大34mの津波が想定されている黒潮町との連携を模索し、黒潮町福祉まつりに参加している。また、地域以外でもNPO中間支援組織と連携し広島土砂災害支援や「女性や子どもの視点でつくる避難所運営」研修など、他分野と連携して防災課題の解決に取り組んでいる。

こうした取り組みの成果として、「ぼうさい甲子園:ぼうさい大賞」や「輝く女性応援会議」での登壇、防災研修でのファシリテーターなど、多方面から連携について声かけをいただいている。

地域と大学の「架け橋」に！

地域の声

【三里みらい会議副会長】西森 茂

「地元に大学ができた!」ということで、池キャンパスの誕生はうれしかったですね。特に、三里まつりを一緒にやっていた頃は、本当に楽しかった。

南海トラフ地震が発生したら、池キャンパスに避難します。だから、日頃からもっと密着しておきたいですね。

三里みらい会議で、学生さんたちと協働しています。「みさとフェア」や運動会に参加してくれています。三里小学校で行われた泊まり込みの災害訓練の「夏の陣」「冬の陣」にも学生さんが参加していましたが、ああいう活動は大切です。イケあいのメンバーを見て、「将来県立大学に入りたい」という地元の子どもが増えたら良いですね。

高知医療センターと県立大学の合同災害訓練に地域住民も参加しています。だから思うのですが、もっともっと三里地区の住民と大学の距離が縮まってほしい。かつての三里まつりのように、大学のキャンパスを使った日常的な交流がたくさんあった方が良いと思います。

イケあいの学生さんたちには、地域と大学の「架け橋」になってほしいですね。

学生の声

三里地区は「社会の学校」です！

【文化学部2回生】小林 美輪

英語の教師になることを目指して、京都から高知県立大学に来ました。

1回生の夏、東北の被災地を支援するボランティア「夏銀河」に参加しました。「3.11」以来、被災地に行ってみたいと思っていました。もっと復興が進んでいると思っていましたが、実際に行ってみると、まだ野原のままで…。「この景色が高知でも起きるかもしれない」と、南海トラフ地震が心から怖くなりました。

三里地区は住民の防災意識がとても高い地域です。私たちは防災のイベントに参加したり、運動会やお祭りでも仲間に入れてもらっています。みなさんとてもやさしくて、学生を大切にしてくださいます。

私にとっての三里地区は、「社会の学校」です。社会人になるとさまざまな世代の方たちと接することになります。防災活動をきっかけに、多世代のみなさんと協働する方法を教えていただいています。学生が地域で、企画から参画させてもらうことは貴重な体験です。

京都に帰った後に「南海トラフ地震が発生したらどうするか?」。もちろんできるだけ早く駆けつけます!

平成25･26年度の主な活動

活動が認められて全国表彰2回受賞！

※ぼうさい大賞受賞（ぼうさい甲子園:25年度）
消防庁長官賞受賞（防災まちづくり大賞:26年度）

◎三里地域での活動
みさとフェアへの参加、三里地区運動会の企画会議への参加と当日参加。避難路整備に参加など地域の各種行事に参加。三里小学校での防災授業で発表。
◎黒潮町福祉まつりへの参加。三陸産ワカメごはんの提供と大槌町ストラップの販売
◎女性や子どもの視点でつくる避難所運営研修の実施（NPOとの共催）
◎未災地ツアーの実施（県外学生17名が参加。文部科学省事業とタイアップ）
◎朝倉地区防災展への出展
◎輝く女性応援会議in高知で登壇（内閣官房･高知県主催）
◎南海地震フォーラムでの登壇（須崎地区でのまち歩きの実践とフォーラムでの登壇）
◎広島土砂災害支援:義援金（514,473円）とタオル支援（9,090枚）
◎高知県主催の自主防災組織リーダー研修等にファシリテーターとして参加

担当から

「学生たちの急成長に驚いています」

【担当職員】学生課チーフ　山﨑 水紀夫

東日本大震災では、支援に強い関心はあるが費用や日程の確保がネックになり、一歩が踏み出せない学生が多いことを知りました。背中を一押しする必要性を感じ、防災サークル結成、復興支援バスという環境までは整えましたが被災地支援を体験してからの学生主体の動きは目を見張るものがありました。

三里地域の活動に積極的に参加し、消防団員になった学生も（女子）。そうした中、「未災地ツアー」を実施。この活動が高い評価を受け、結成わずか2年で大学部門の最優秀となる「ぼうさい大賞」を受賞するまでに成長しました。これも学生と共に歩んでいただいた地域の方々の支援あればこその受賞だったと感謝しています。

地域×大学＝域学（いきがく）

②

［ミッション］

イベントを通じて中山間地域の再生と活性化を目指す！

［チーム名］

活輝創生実行委員会

活動の目的

中山間地域の再生と活性化を目指して活動を続けている。

全国の中山間地域と同様に、少子高齢化・過疎化が進行している香美市土佐山田町平山地区と高岡郡佐川町尾川地区の現状を変えるために必要な「つながり・絆」を再生し、地域住民と協働しながら失われつつある活気を取り戻すことを目的としている。

名称の「活輝創生」には、中山間地域に生き生きと輝く活気を生み出したいという思いを込めている。

学生と教員が地域に出て、地域のみなさまと協働して地域の問題と格闘する。地域住民の夢を聞き、その夢を実現するためのお手伝いを続けている。

［構　成］

学生31名（文化学部、社会福祉学部）

教員2名

「地域住民のつぶやきから始まった中山間地域の活性化！」

活輝創生実行委員会の母体となった文化学部地域文化論ゼミが、廃校を活用した地域交流施設・ほっと平山でゼミ合宿を行った。その際、学生たちが廃校を利用した地域活性化の事例を調べてほっと平山の職員らに向けて発表したことをきっかけに交流が始まった。

地域の課題を聞きに行くというフィールドワークを行ったとき、ある学生が「石窯で焼いたパンを食べたい」という女性のつぶやきを聞いてきた。そこから構想は進み、「地産地消のピザを焼くための石窯を設置する」という課題が生まれ、学生が獲得した助成金を資金に、平成24年10月に石窯を設置した。さらに、ほっと平山と協力して、休耕田で小麦を栽培し、その小麦粉で焼いたパンやピザ、地元の食材を使った料理を楽しむ「収穫祭」を実施している。この開催にあたっても、学生が助成金を得ている。

この地域では、旧平山小学校が廃校になってから地区運動会が開かれていなかった。あるとき、地元のお年寄りが、「もう一度運動会をしたい」とつぶやいたことから、学生が地域住民を巻き込みながら企画・準備し、平成24年11月に「平山大運動会」を開催し、毎年続けている。このときも、香美市からのまちづくりのための助成金を得ている。

運動会の復活を契機に、廃校になってから開かれていなかった夏祭りを復活する機運が地域住民の中で高まったので、学生たちが企画、寄付集め、開催準備、当日の運営などを手伝って、平成25年8月に復活した。

このような活動を通じて、学生は中山間地域が抱えている課題の深刻さを認識し、平山地区の全戸を対象に集落調査を実施した。調査結果を平山地区住民の代表に報告し、地域住民の中で、課題の共有と解決に向けての話し合いが始まっている。

平山地区での活動を知った佐川町の職員が、担当教員に協力を依頼したことがきっかけで、佐川町尾川地区の集落活動センターたいこ岩との交流が始まっている。活動はまだ緒に就いたばかりだが、地域の広報紙「おがわだより」の復刊など、成果もあがってきている。

学生のおかげで、世代間交流が進んだ！

地域の声

【地域交流施設 ほっと平山前代表】山崎 周作

平山小学校があった頃は、地域行事などで多世代の交流がありました。でも、廃校になってからはそれがなくなった。同じ地域で暮らしていても、若い人とお年寄りが一緒に話す機会はあまりなかったです。

でも、学生さんたちがイベントに来て活動し、懇親会に参加してくれると、世代を超えて地域のことを話すようになりました。若い人たちは、年配の人たちが話を聞いてくれるようになったと喜んでいます。地域にとってはとても大きな力になっています。

私たちだけで話をしても、やれないことばかりしか考えない。後ろ向きの話ばかり…。でも、学生さんたちと一緒だと、前向きの話になる。廃校以来途絶えていた運動会や夏祭りを復活してもらって、元気が出ました。石窯も作ってもらい、地域外の人たちとの交流の機会も増えた。いろんなことをやってくれて、本当にありがたいです。

学生のみなさんは、中山間地域の厳しい状況を肌で感じてくれたと思います。卒業したら、高知県に限らず、できれば地域で仕事を見つけて、地域に残ってほしいですね。

学生の声

平山は私の元気の源です！

【文化学部4回生】岡崎 史花

高校までの私は、本番でいつも力が出せませんでした。でも、今は違います。平山で地域のみなさんと関わり、まちづくりイベントを担うことで、そういう欠点を乗り越えられました。

「平山大運動会」で初めてイベントの運営に関わりました。以後、桜祭り、復活夏祭りなど、精力的に参画しました。7ヶ月間かけて育てた平山産小麦を使い、高知新聞厚生文化事業団の助成金を得て開催した「収穫祭」は、やりきった感がありました。

イベントのたびに、地域のみなさんが喜んでくださって。そのたびに、信頼されていったと思っています。みなさんの笑顔が違うんです。通うたびに、「また来てくれた」と、地元の方の表情が明るくなる。顔がほころぶんです。それが力になりました。期待されるとうれしい。期待に応えられたらもっとうれしい。地域のみなさんに「ありがとう!」と言ってもらえたら、もっともっとうれしい。

平山は不思議なところです。少し元気がないときでも帰り際には「また頑張ろう」って気持ちが変わるんです。卒業しても、平山とのご縁は続けます!

平成25･26年度の主な活動

中山間地域をまちづくりイベントで元気に!

◎石窯の設置
◎地域の伝統行事の復活
　①平山大運動会の復活と継続開催②平山夏祭りの復活と継続開催
◎平山地区における集落調査と報告書の作成･提言
◎「平山産小麦収穫祭」の企画･イベント開催
◎「地域交流施設『ほっと平山』の事業に関する提言」の作成･提言
◎「平山地区の今と未来を考える会」の参加･協力
◎高知県芸術祭「平山ノート」の参加･協力
◎平山地区における「桜祭り」の企画･参加･協力
◎尾川地区の広報紙「おがわだより」の復刊
◎尾川地区秋祭りの参加･協力
◎尾川地区小麦イベントの企画･参加･協力
◎四万十市片魚地区ふるさと祭の参加･協力
◎本山町上関奉納相撲の参加
◎高知南高校「マネジメント学習事前学習」の企画･運営

先生から

学生は地域で生き方を学ぶ!

【専任教員】地域教育研究センター教授　清原 泰治

ある学生に聞かれました。「活輝創生実行委員会は夏休みがないのですか?」と。もちろんあります。でも、学生たちは休み中も足繁く地域に通い、課題解決に向けて話し合い、活動しています。やり遂げたときの感動はすばらしく、それゆえに学生たちは地域の課題と格闘しています。平成26年度からは社会福祉学部の学生も加わり、活動の幅が拡がりました。立志社中の他のグループとも協力関係ができて、楽しさがさらに高まっています。

地域のみなさんは好意的で、学生を育ててくださっています。もちろん、厳しいことを言われることもあります。そういう中で、学生たちは社会の現実を知り、生き方を学んでいます。キャンパスでは学べないことが、地域にはあります。

地域×大学＝域学（いきがく）③

［ミッション］

おいしいお米で地域活性&食育

［チーム名］

COME☆RISH

活動の目的

中土佐町大野見地区の農家グループ「おおのみエコロジーファーマーズ」（以下おおのみEF）は、四万十川源流域で、環境浄化微生物を用いるなど、環境保全に配慮した米作りを行っている。COME☆RISHは彼らが生産するおおのみエコ米を通じて、中土佐町地域の地域活性化を目指している。

米食がもたらす栄養バランスのとれた食事を広めることは、管理栄養士養成課程で学ぶ学生としても重要な目的であり、米飯に合うおかずのレシピ集作成に取り組んだ。レシピ集を用い、県内で行われる地域行事を通じて米食の良さを、PRしている。また、中土佐町の人々との交流から町民・学生共々がお互いに学び合い、発展していく（域学共生）ことも目指している。

［構　成］

学生18名（健康栄養学部）

教員3名

「おおのみエコ米と共に!域学共生」

平成25年1月頃、おおのみEFの方が訪れ、「私たちが作ったお米を食べてみてほしい」と言われたことがきっかけで、おおのみEFとのお付き合いが始まった。田植えまではいわば「お客さん」状態であったが、立志社中の募集を知り、「自分たちでできること」を見つけるため、仲間たちで応募し、助成を受けることができた。

活動1年目は、メンバーのほとんどが1回生ということもあり、「何をすればよいのか」を模索した1年であった。しかし、大野見に通い、エコ米のことを学び、試食のお手伝いをすることで、農家のみなさんのお米に対する思いを知ることができた。課題として、「おおのみエコ米の良さを知ってもらい、地域活性に繋げるにはどうすればよいか」があげられた。そこで、「学生らしいPR活動」として、地域行事や学祭でのPRや、様々なツールの利用（Twitter,Facebookなど）を行い、また、管理栄養士を目指す観点から、レシピ集の作成にも取り組んだ。試行錯誤を重ね、多くの人からアドバイスをいただいて完成させた。完成したレシピ集は高知市内、中土佐町等で配布、アンケートの結果から、高齢の方まで高い評価をいただくことができた。

2年目は新入生が加入し、さらに動ける組織として、おおのみEFの方と密に連絡を取りながら、行事を進めることが課題となった。また、レシピ集にはさらに工夫を重ね、第2弾として発行、より多くの高知県民に大野見のことを知ってもらうべく、活動中である。今年度は、学生の活動を中土佐町民にも知ってもらうため、現地で報告会を行った。活動の報告、エコ米の試食、レシピの油みその試食も併せて行い、副町長をはじめ多くの町民に活動を広める第1歩となった。さらに、12月に地域食材を使い、レシピ集の献立を取り入れた食事を提供する定食屋を大野見青年の家で行ったことで、地域グループ、農家との交流がさらに活発となった。

一流の農家を目指して、本気になりました！

地域の声

【おおのみエコロジーファーマーズ会長】高橋 正二郎

「大野見のきれいな水でおいしいお米を育てたい。そのお米でたくさんの人に喜んでもらいたい」という思いで、3年前にエコロジーファーマーズができました。でも、メンバーは忙しくて、イベントをしてもなかなか全員が揃わない。また、米作りには家々に「秘伝」のようなものがあって、共通の栽培マニュアルを作るのは困難を極めました。

学生さんが来てくれるようになって、農家は変わりました。「本気になった」。平成25年度は売り上げが前年比4倍。26年産はさらに倍です。

農家は恥ずかしがり屋が多くて、イベントなどでお米を買いに来てくれた人とうまく話ができない。でも、どんどん話をする学生さんを見習って、説明が上手になりました。学生さんが頑張っている姿を見て、農家が本気になっている。一流の管理栄養士を目指す若者たちが来ているのですから、私たちも一流の農家にならないと！

平成27年度に、大阪の企業の方とその家族、計40人が体験農業に来る予定です。学生さんとの活動を通じて、私たちは農業の説明ができるようになっています。一歩前にでる勇気と自信を持って受け入れます。

学生の声

コメ作りで地域を活性化したい！

【健康栄養学部2回生】式地 麻湖

地域にこんなに受け入れていただけるとは思っていませんでした。私たちは思いを共有しながら一つの目標に向かっています。「おおのみエコ米をとおして、中土佐町の活性化を実現したい！」それが夢です。

平成25年6月に田植え体験に呼んでいただいて、地元のみなさんの温かさと大野見の自然が大好きになって、「私たちが力になれないか」と思いました。島田先生の研究室で、「こんなのあるよ」と見せられた立志社中募集のチラシ。「これだ!」と迷いなく応募し、採択されて活動が始まりました。

初めのうちは戸惑うこともありましたが、だんだん主体的に考えて活動できるようになりました。大学祭で展示して、その後、エコ米に合うおかずを考えて「レシピ集」を作りました。昨年12月には「定食屋」のイベントを実施して、地元のみなさんに私たちの作った料理を食べてもらい、とても喜んでいただきました。

ここのお米はおいしさが違います!土地の気候や環境がお米の味に現れます。生産者の地元に対する愛、努力がお米の味になるんです。将来私たちが管理栄養士や栄養教諭になったとき、この体験を子どもたちに伝えたいと思います。

平成25･26年度の主な活動

コメ作りから流通、PR、調理まで、住民と“共育”！

◎大野見地区圃場での水質調査（四万十川）
◎レシピ集作成
◎大学祭（紅葉祭）でのおおのみEFの活動を紹介
◎新米の官能検査
◎EFメンバーとの交流（稲刈りにかえて）神母野訪問
◎新米フェスタでのPR活動
◎ふるさとまつりでのPR活動
◎大野見イルミネーションにおける中学生との交流
◎中土佐町門前町でのレシピ集配布、試食、アンケート配布
◎高知市内でのレシピ集･新米の配布（てんこす、帯屋町）
◎中土佐町、大野見地区でのレシピ集配布とPR（黒潮本陣、源流の家）
◎第2弾レシピ集作成
◎大学祭（紅葉祭）でのおおのみEFの活動を紹介　レシピ集より試食実施
◎中土佐町にて活動報告会（副町長出席）
◎新米の官能検査
◎新米フェスタでのPR活動　酢鶏の試食
◎近江楽座との交流
◎立志社中他チーム（活輝）との交流
◎定食屋開催（50食、大野見青年の家）
◎[予定]中土佐町門前市、高知市内でのレシピ集配布、PR活動

先生から

地域の食材を生かせる管理栄養士に！

【専任教員】健康栄養学部講師　島田 郁子

去年の6月、大野見地区で大騒ぎしながら田植えをした彼女らが、今年は昼食をお客さまに出すまでに成長したことに、いまさらながら感動しています。

管理栄養士の仕事は、病院での栄養管理や指導といった臨床栄養業務、給食サービス等の給食業務など多様です。しかし、管理栄養士でありながら、地域の食材の専門家である人は少ないと言えます。少子高齢化の特に進んだ高知県で、学生たちのように大野見地区のみなさんとの交流活動をとおして、食材のルーツを学び、流通、入手、調理を経て人の体に入るところまでをきちんと学ぶことは、彼女らの将来に必ず役立つと確信しています。

地域×大学＝域学 いきがく ④

［ミッション］

「民俗・言語調査」を通じて地域と連携し活性化を目指す！

［チーム名］

from ZERO（フロムゼロ）

活動の目的

中山間地域のフィールドワークを行い、専門性を生かした地域貢献活動を行うことを目的としている。大学とその他の教育機関・高知県立歴史民俗資料館などの博物館・行政・NPO団体・地域住民との連携によって活動を行っている。

幡多郡三原村の全集落13地点および周辺地域の四万十市・宿毛市・土佐清水市の9地点における民俗・言語調査を実施した。現在、「モノ・コト・ヒト」の移動がわかる『民俗・言語地図』の作製を目指して、現地での聞き取り調査を続けている。その他、安芸郡東洋町、香美市物部町においても実施している。

次世代への継承も目的としており、この活動を地域の活性化につなげたい。

［構　成］

学生8名（文化学部）

教員1名

カンカンミンガク（館・官・民・学）で地域の課題を解決！！

三原村では、1980年に文化財保護委員会が「なくなってしまわないうちに集めておこう！」と数年間にわたって古民具を収集し、明治から昭和までに使用されていた機織りや糸車、石臼、食器などの民具約300点を中央公民館に保存してきた。2009年になり、三原村教育委員会から「民具の収集はしているが、整理をするのに手伝ってもらえないか」という依頼があった。そこで、文化学部の橋尾直和教授が、「日本語言語文化論演習」受講の学生たちと高知県立歴史民俗資料館と協働で、「この課題に取り組もう！」と始めたのがきっかけである。民具調査は、2009年と2011年の5回にわたって実施した。

まず、番号札との照合、民具のクリーニング、分野ごとの整理から始めた。スケッチ・実測・写真撮影に始まり、民具を使ってこられた話者への聞き取り調査を実施した。こうして、カード作製が完了し、三原村教育委員会に寄贈するに至った。この時、民具の数は450点を超えていた。

2013年、「立志社中」における学生主体の活動として、「モノ・コト・ヒト」の移動がわかる『民俗・言語地図』の作製を目指して、現地での聞き取り調査を続けることになった。三原村の全集落13地点と周辺地域9地点にて「民具の方言呼称」の聞き取り調査を実施した。まさに「from　ZERO（フロムゼロ）」、ゼロからの出発であった。2014年、高知県立歴史民俗資料館で開催された企画展「椿姫の里・三原」の展示と「第39回日本民具学会高知大会」の発表によって情報発信した。さらに、三原中学校の生徒たちとの共同による民具調査も実施した。これからも、高知県の発展に少しでも貢献できるよう頑張りたい。

学生が磨いた民具を見て「目が覚めた!」

地域の声

【三原村文化財保護委員会会長】宮田 守

5年前から三原村の文化財保護委員会の会長を務めていますが、それ以前にも、文化財保護に向けての取り組みがこの村ではあったそうです。でも、その時は、順調には進まなかった。

文化学部と三原村が、文化財調査と保護の協定を結んで、橋尾直和教授が乗り込んでこられた（笑）。そこから変わりました。倉庫に集めてあった民具を、学生さんたちがきれいに磨いて整理し、並べてくれた。それを見て文化財保護委員たちは「目が覚めた!」。かつては、「民具は村づくりの役に立たない!」と思っている人は少なくなかったのです。でも、今は違います。お年寄りたちが「私もやる!」と。民具の大切さに村民が気づいたのです。

学生さんたちと一緒に、民具の使い方や方言呼称について調査しています。外からの目で、学生さんに意見を言ってもらうこともありがたいです。

今夏、中学生も一緒に民具調査をしました。学生さんたちが中学生の支えになってくれた。民具は一度なくなったら、再生は不可能です。ですから、次世代につないでいくことが大切です。

三原村では、民具資料館をつくる計画があります。
ぜひ、協力してもらいたいですね。

学生の声

民具調査は大切なまちづくり活動です!

【文化学部4回生】速川 礼羅

卒業研究で、高知県幡多郡、特に三原村とその周辺地域の民具に関する方言呼称の地域差や変化について研究しました。from ZEROでの活動が、この研究のきっかけです。文化学部を志望したのは、地域の民話や伝説を学びたかったから。幼い頃から、祖父母に昔話を聞くのが大好きでした。方言にも興味があり、橋尾直和教授の門を叩きました。研究室に入ってみたら先輩たちが民具の研究をされていて…。民具の研究では、方言と民俗と、同時に研究できます。

私は人と話すのが苦手でした。あいさつもろくにできなくて。でも、調査では「やるしかない!」。三原村のみなさんは“サービス精神”があって（笑）、たくさん話をしてくださいました。今は、大きな声で、わかりやすく話せます!

平成26年度に、三原村の中学生と一緒に調査をしました。地域の次代を担う若者たちに、地域の歴史や文化を伝えることは重要です。お年寄りはみんな、子どもたちに知っていることを話したいんです。表情が明るくなります。調査を通じて、地域のみなさんが元気になります。民具調査は、大切なまちづくり活動だと思っています。

平成25･26年度の主な活動

地元のみなさんと中学生との調査活動を通じて地域を活性化!

◎「モノ･コト･ヒト」の移動がわかる『民俗･言語地図』作製
- 幡多郡三原村の全集落13地点にて「民具の方言呼称」の聞き取り調査
- 『三原のくらしとことば』刊行
- 『高知県立大学文化論叢』第2号への取り組み内容掲載
  「三原村民俗･言語調査プロジェクトの報告ー民俗･言語地図の試みー」
- 四万十市･宿毛市･土佐清水市の三原村周辺地域9地点にて「民具の方言呼称」の聞き取り調査
- 「第39回日本民具学会高知大会」（奥物部ふれあいプラザ）での発表と運営ボランティア
- 「三原村と周辺地域の『民俗･言語地図』報告書」刊行

◎高知県立歴史民俗資料館企画展「椿姫の里･三原」でのパネル展示

◎「三原中学校」の生徒たちと
「民具の方言呼称」共同聞き取り調査
※平成25年度「学長賞」受賞

先生から

専門性を生かした地域貢献!

【専任教員】文化学部教授　橋尾 直和

「立志社中」from ZERO（フロムゼロ）のメンバーへ。マニュアルもない状況から、予備調査･本調査･補足調査と、自分たちで議論して完成させた調査票を用いて、85歳前後の地元の話者のみなさんと向き合い、熱心に聞き取り調査を行った成果がやっと結実しようとしています。まさに、専門性を生かした地域貢献プロジェクトです。地図解釈をめぐっては、演習で遅くまで徹底的に議論しましたね。学長賞に輝いたことを励みに、これからも頑張りましょう!!

カンカンミンガク（館･官･民･学）の連携で、次世代につなげる地域貢献活動としても活躍できるよう、エールを送りたいと思います。

卒業生

地域での活動に積極的に参画して!

宇賀 文里（うかあやり）
平成26年3月社会福祉学部卒業
現在は、社会福祉法人梼原町社会福祉協議会主事
梼原町女性消防隊員

田中きよむ先生のゼミはフィールドワークが魅力でした。実際に自分が参加することで、地域の方々の力になれていることが嬉しかったですし、直接関わることで、教えてもらえたこと、楽しかったことなどいただいたものも多かったです。

キーパーソンや、その人の力になりたいと思うようになった方の話は本当に貴重で、魅力的で、地域には熱い思いをもった方がたくさんいて、それをつないでいくとステキな場ができると感じました。

大学を卒業して、平成26年4月から梼原町社会福祉協議会で働いています。地域の魅力を発見するための座談会を開催したり、ボランティアセンターの設立準備もしています。地域の女性消防隊にも加えていただいて、活動に参加しています。将来は、「宇賀が地域に来てくれて良かった!」と言われる人になりたいですね。

学生が地域に入ってくれると刺激になります。住民の意識が変わるんです!「学生はすごい!」だから、地域での活動に積極的に参画してください!

学生時代の感動がエネルギー

山家 春香（やまいえはるか）
平成24年3月文化学部卒業
公益財団法人香川県体育協会クラブアドバイザー
一般社団法人Coクリエーション理事

清原泰治先生のゼミをきっかけに、まちづくりに参画するようになりました。3回生の時、高知こどもの図書館が10周年を迎えたので、記念行事として「巨大絵本」を製作しました。地元の作家が書いてくれた絵本を、縦横1.7メートルの手作りの巨大絵本にしました。私は、企業に協賛をお願いして、資金集めに奔走しました。若者の夢を実現するために、たくさんの企業が助けてくださった。とてもうれしかったし、若い力の可能性を学びました。

今は、高松市で、市民活動に参加しています。去年は、高松市美術館から協力をいただいて、夜に美術館のエントランスを開放し、「ナイトヨガミュージアム」というヨガイベントを実施しました。みなさんにとても喜んでいただいて、巨大絵本を作ったときの感動がよみがえりました。

みなさんの笑顔を力に、学生の時に感じた感動を大切にしながら、地域の中でできることに取り組んでいます。

地域に学び、地域で育つ 学生たちのための教育プログラム

［立志社中］

高知県は多くの有為な人材を生み、若者たちは世界へと飛び立っていきました。日本で、そして世界で通用する人材を本学で育てたいという想いを込めて、坂本龍馬の「亀山社中」（後の海援隊）と、板垣退助らの「立志社」を合わせて、本事業を「立志社中」としました。「社中」には、「仲間」「結社」という意味があります。つまり、「立志社中」とは、「将来の目的を定めて、これを成し遂げようとする学生グループ」という意味です。
立志社中には3つの目標があります。

1. **地域の課題に高い関心を持った学生が、地域の方々と共同して取り組む。**
2. **学生が地域の方々と一緒に活動することを通じて、学内だけでは学べないことを学ぶ。**
3. **大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。**

立志社中は平成25年7月に、6チーム、参加学生数102名でスタートしました。平成26年度は8チームに増え、参加学生数266名で、高知県内を中心に活発に活動しています。

［地域学の必修化］

平成27年度入学生から、地域学関連の3科目を必修化し、すべての学生が地域で学び、地域で活動します。

1回生の前期には、「地域学概論」で、地域課題を学ぶ意義や、具体的な高知県の地域課題、地域活性化の取り組みの事例などを学習します。

「地域学概論」での学習成果を生かして、すべての1回生が集中形式で実施する「地域学実習（特）」に参加します。この実習では、地域の実態と課題を把握するための調査・記録活動や、実際に地域で展開されている地域づくりの活動等に参加して、課題解決に向けての考え方や取り組み方を現地で学びます。

さらに、専門教育科目で身につけた知識や技能を生かして、2回生以降に「地域学実習Ⅱ」を受講します。「地域学実習Ⅱ」では、学生が自らの関心に応じてテーマや実習場所を選択し、地域で実際に課題解決に取り組んでいる人々と協働して活動します。

その他にも、地域課題を取り扱う講義・演習・実習、課題へのチームでの取り組み方を学ぶ科目や地域課題解決にチームで取り組む「域学共生実習」を学生に提供します。

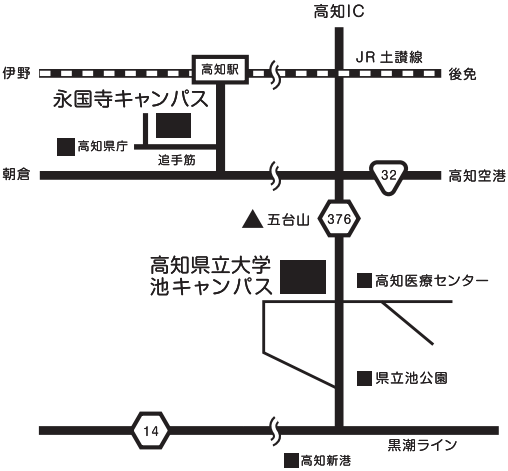
高知県立大学は「県民大学」

高知県立大学は、今年で創基70年になります。開学以来、地域に根差した大学を目指していましたが、それは主として有為な卒業生を社会に送り出すことをとおして地域に貢献するということでした。

平成23年4月に法人化し、男女共学となり、高知県立大学に改称しました。本学は、「県民大学」をスローガンとして、地域と共に歩む大学へ大きく舵を切り、新たな船出をいたしました。

本学の学生たちは、地域に飛び出して、自分たちで企画・実行しながら、地域活動に参画しています。学生の感性と情熱、未来を拓く夢と知恵が、これからの社会づくりに大きな力となることを確信し、大学として全力を挙げて学生たちを支援します。

高知県立大学 学長　南 裕子



◎永国寺キャンパス
高知駅より車で約5分

◎池キャンパス
高知駅より車で約25 分

高知県立大学

〒781-8515 高知市池2751-1　☎088-847-8700（代表）

http://www.u-kochi.ac.jp